NIHON FUKUSHI UNIVERSITY
日本福祉大学 国際福祉開発学部だより
News Letter Faculty of International Welfare Development 07
June. 2016 vol.

〒477-0031　愛知県東海市大田町川南新田 229　日本福祉大学 国際福祉開発学部　http://facebook.com/nfuiwd/

目次

1～3　国際フィールドワーク
4　アクティブラーニングを使った授業
　春季セミナー
5　新入生代表の声、留学生の声
6　海外インターンシップ
　ふくし AWARD 受賞者
7　英語キャンプでのボランティア
　卒業論文紹介
　卒業生は今
8　就職状況
　新任教員の挨拶
　学部の前期予定

フィリピン、マレーシア、カンボジア、インドへ行ってきました！

Philippine Study Program
フィリピン研修

佐藤 慎一 教授

フィリピン研修の本年度のテーマは“Celebrating Young Bridge Builders”とされ、世界をつなぐ懸け橋となる若者としての自分達を意識させてくれる充実のプログラムが提供されました。学習は原則として、〈講義〉→〈関連の組織訪問〉→〈振り返り（フィリピン大学の教授・研究員らの進行）〉といった流れで行われ、学習内容が着実に身につくように考えられていました。振り返りでは、日々の振り返りを積み重ねた上で、プログラム全体の振り返りも行われました。２週間のプログラムの日々の振り返りで積み重ねた学習内容のキーワード、その時の気持などを時系列に模造紙に並べての振り返りは、なかなか壮観なものでした。

研修全体の振り返り

ラジオへの出演

すべての学習プログラム終了後には、学生全員、研修担当のフィリピン大学教員が持つラジオ番組に出演させてもらいました。Twitter などからのリアルタイムの反響もあり、緊張しながらも各自の学びや思いは届けることができたようです。帰国後には、研修時、学生達のホストファミリーとなっていただいた家族の方々が番組に招かれ、学生達との体験・異文化交流について語ってくれました。学生達はその模様をインターネット経由で聴き、フィリピンでの経験、そこでの人との出会いに各自思いを馳せていました。

今でもフィリピンの多くの方々と SNS でつながっており、交流を維持しつつ、日本での学習や各種活動の姿を発信しつづけてもらえたらと思っています。

Broadening Students Horizons
マレーシア研修

Gary Kirkpatrick 助教

The 2015 Malaysian Fieldwork program took place from February 13th to February 28th. 11 students from the International Welfare Development faculty visited Penang city. The Malaysian group spent two weeks studying at the main campus of the University Sains Malaysia which is a large public university located in historical Penang city on the island of Penang just off the west coast of Malaysia. Over the two-week stay they had special classes about Malaysian culture and society and they further took part in numerous activities that let them experience the culture, people and history of Malaysia first hand.

These included visits to museums, religious sites, historical areas and N.P.O.s and N.G.O.s. From these experiences our students acquired a better idea about the history of Malaysia and gained insights into how such a diverse society of people could live and work together in harmony. Most importantly the many occasions where they communicated with their host families and with the U.S.M. buddies helped them develop themselves as individuals in terms of their communication abilities and come to understand through direct interaction with Malaysian people more about themselves and the world. The students have made friends and developed bonds with Malaysia people, which will last a lifetime.

引率しながらも、学生たちに嫉妬した２週間
カンボジア研修

中西 哲彦 准教授

１．若者たちとの出会い

３つの大学（王立プノンペン大学、カンボジア工科大学、パンニャサストラ大学）を訪問し、社会問題や学生生活についてプレゼンテーション形式で紹介しあったり、その合間には、楽しく語り合える時間を持った。アジアの共通言語は英語だ、という認識とともに、カンボジアの学生たちの「学び」に対する真摯な姿勢に打たれたはずだ。さらに、日本カンボジア人材育成センターでも、多くの若者たちと交流する機会を持つことができた。

２．高校生、中学生たちとの出会い

高校や中学も訪問することができた。カンボジアで活躍する卒業生（鈴木ゆか）や、毎年日本福祉大学国際福祉開発学部が中心となって実施している World Youth Meeting への参加者との交流のおかげであった。冷房の

ない暑い教室で、熱心に授業を受ける若者たち、熱心に教える教師たちの姿に、学生たちの心は大いに動いたようだった。日本もアジアの一部であり、アジア諸国との連携なしには、日本の未来は語れない。これからの時代を共有する彼らと出会えたことは、学生たちの将来にとって、大きな糧になったはずである。

3．発展途上が故の格差、貧困の現実

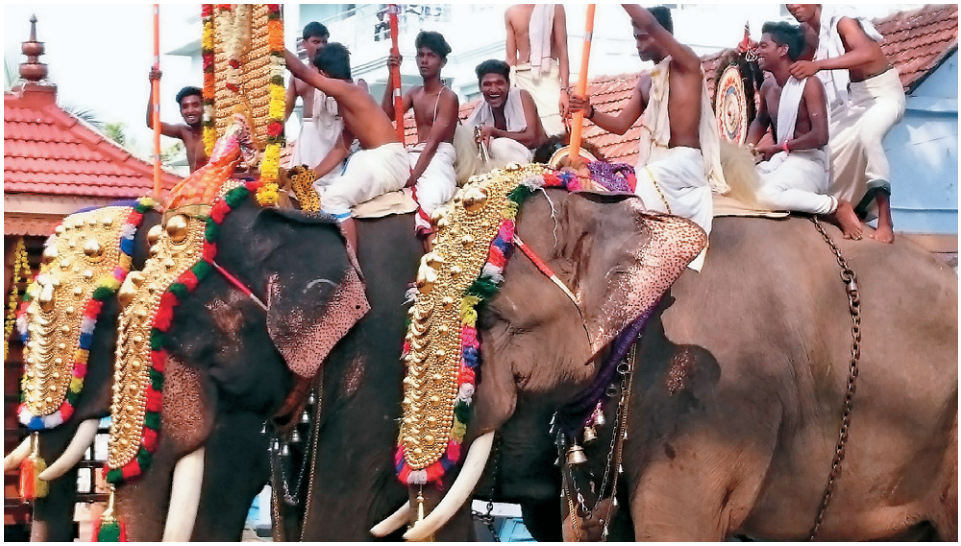
「レストランから食べ物をもらったり、物乞いで、食べていました。ここでは、おいしいご飯を、たくさん食べることができます。」と話した笑顔の子供たちに象徴されるように、まだまだ貧しい人たちがいる。孤児院を訪ね、車の入れない道を歩いて、地方の村を訪ね、壁や屋根がヤシの葉という民家の中にも入れてもらい、電気や水道のない暮らしを垣間見る、そうした体験と同時に、救いの手をさしのべる援助活動の実態も見ることができた。その一方で、首都プノンペンの建築ラッシュや高級車とトゥクトゥクが交じり合う渋滞の実態、そびえ立ついくつもの高層ビル、経済特区の工場なども目の当たりにした。

1年生の間にこのような濃い内容のフィールドワークに参加している学生たちが、羨ましくてならなかった。2年生、3年生と、今度は自分で考え、テーマを絞り、さらに深い見聞調査を目的に海外へ繰り出してくれることを期待している。

India Study Program
インド研修

斎藤 千宏 教授

インド研修は前半と後半に分けられます。それぞれ1週間ずつ。前半は、インド南西部に位置するケーララ州の中心都市であるコチンを舞台に、同地の名門カレッジである Sacred Heart College の学生たちと交流しました。また同校の先生たちからインドの歴史や社会、政治経済などの講義も受けました。政党主導のストライキに遭って、すべての交通機関がストップするというハプニングもありました。コチンからは夜行列車でバンガロールに移動しました。バンガロールは周知のごとく世界に名をとどろかせているインドの ICT 産業の中心地。また近郊にはトヨタのインド工場もあり、そこを訪問見学しました。後半のプログラムは大神のりえマニカトご夫妻によるアレンジメントです。



農村部でのホームステイや学生たちとの交流、インドで一番大きいマハラジャ宮殿観光、マザーテレサ施設の見学など盛りだくさんの内容。ここでは地方自治体議員選挙と重なって、予定が若干狂いましたが、現地の人たちが柔軟に対応してくれました。インドという異文化に触れ、疲労困憊しながらも大きく体調を崩す学生もなく、多くの学びを得て帰国しました。

アクティブラーニングを使った授業

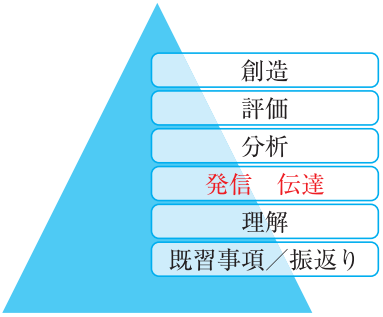
アクティブラーニングのキーポイント

影戸 誠 教授

本学部では創設以来、アクティブラーニングを重視した教育手法に取り組んできています。2015年度に新しく開設された東海キャンパスでも、アクティブラーニング専用に10教室がデザインされ、国際福祉開発学部の多くの授業で使われています。

「開発ソーシャルワーク演習Ⅱ」の科目では多文化共生や農村開発など、多様な人々と協働する現場で求められる「他者を理解する方法」を実践的に学んでいます。1年次のフィールドワークから積み重ねてきた学生たちの「質問力」「観察力」を改めて問い、意識的に使えるスキルへと育てることが狙いです。

「インタビュー実践」演習では、教員から問題提起を受け、グループで話し合い、それをボードに「外化」してさらに論議を重ね、分析し、自分達らしさ（新しいモデル）を作りだします。学生は議論のプロセスをとおして、「自分自身とのコミュニケーション」を深め、他者と「学習」を共有していきます。



学生たちの学習構造、ブルームによる分類　1971

考えを外化し、深める

「模造紙に〈清書〉していた一昨年までに比べて、自由に加筆修正できるボードを活用することで、消極的な学生も発信しやすくなりました。」「教室の前後左右を自在に〈正面〉に見立ててプレゼンできるため、発言者が固定化せず柔軟に授業運営できます。」（小國先生）と述べられていました。

【春季セミナー】４月１７日・１８日

新入生・上級生・教員ら約100人が参加！

２年　阿部 誉大（大府高校出身）

毎年春に行われる春季セミナーにて実行委員長をさせて頂きました。変化の無い日々と決別すべく立候補しました。仕事がはじまってみると、やる気とは裏腹に組織運営のことで立ち止まったりアドバイザーの先生方との関わり方が上手くいかなかったり、思っていた以上に大変でした。そんな私をつき動かしていたものがあります。それは新入生に大学での生活を良い意味で楽しんでもらいたいという気持ちです。

この春季セミナーを通してたくさんの学びがありました。新たな出会いを通して、大学生活をより良くするために自分自身がどう動くか明確にすることです。大学入学という節目だからこそ新入生だけでなく在校生にも考える機会が春季セミナーにはあったと思います。大学に入学した意味を考え、仲間とのコミュニケーションを大切に大学での生活を過ごしていきたいと思います。

新入生代表の声

Much more than I had expected

1年　福田 桃子（北筑高校出身）

Q1. 本学部を選んだ理由は？

A1.「世界、貢献、人にやさしく」のキーワードを感じて、この学部を選びました。

Q2. 東海キャンパスの印象は？

A2. お母さんとキャンパスを訪れて一番驚いたのは、教室が個性的だったことです。特に4階のALL（Active Learning Laboratory）教室は自由に発言しやすいように考えられています。

Q3. 高校での授業との感じる違いは？

A3. 英語・日本語で発言する機会がとても多くなりました。例えば、Gary先生から英語で指導を受けるEnglish Presentationの授業ではグループで準備した後に、教室の前でプレゼンテーションを行います。そして、その日のうちに先生に録画されたプレゼンテーションがインターネットの動画サイトから提供され、自分のプレゼンテーションを見て、復習できるようになっています。Gary先生からの評価やコメントも動画で提供されます。さらに、宿題としては、コメントの要点を英語で書いてメールで提出するので、英語を活用している内に英語力と発信力が進んでいきます。

Q4. 他に面白い授業は？

A4. 国際交流ファシリテーション演習という授業では、英語でのコミュニケーション、国際環境の中での協働作業の方法や異文化理解について学びます。今はテレビ会議を通じて、海外の学生に自分の国について教えてもらうことが行われています。カンボジアやフィリピンなどの様子を同世代の学生から聞けるのはとてもいい刺激なっています。世界って動いている、それらの国と日本との関係も今後、どんどん深くなっていくことを実感しました。

留学生の声

Change? → Myself！

2年　崔炯根（チェヒョングン）（韓国出身）

自分は、両親とさらに健康で幸せに暮らせるために必要な福祉は何かを考えました。その結果、日本の福祉の仕組みと各国の現状を学び、将来韓国に必要なものを学ぶために本学の国際福祉開発学部で留学生活を始めました。

来日する前にある程度会話は出来ましたが、詳しい日本文化についてあまりわからなかったので、相手側が軽い冗談を言っても笑えなかったし、日本の大学の仕組みについて戸惑い、相当な不安を感じたこともありました。

わからなかったことがあれば前もって勉強し、相談や質問をしました。事務の方や3、4年生の先輩方のアドバイスは助かりました。その中で「何かを得るためには自らが動かなければならない」という一言が身につきました。

去年、愛知県内の大学で、日本、韓国の大学生が「今後50年後の日韓関係」について語る弁論大会で弁士として参加しました。その時は優秀賞をもらったことも嬉しかったのですが、自分の考えをまとめ、相手を説得する力（プレゼンテーション）を身につけ、自信を持つようになれて良かったと思っています。現在、自分から軽い冗談をいうぐらいまで日本語の実力が上がって、レポートで自分が学んだことをまとめ、考えながら共有することも出来るようになりました。これからの自分は先輩の立場になって新入生の悩みなどを聞くことや、自分の将来の道について設計する時間を持ちたいと考えています。

海外インターンシップ

カンボジアでの海外インターンシップ体験　４年　山田 桃子（日本福祉大学付属高校出身）

なぜカンボジアのゲストハウスでインターン？とよく聞かれます。フィールドワークをキッカケに「もっとカンボジアを知りたい！」と思い、まずはゲストハウスで１ヶ月のインターンをしました。１ヶ月間じゃ物足りないと、同じ場所での長期インターンを決めました。“カンボジア”という国にこだわる理由はただ単に“好きだから”、カンボジア人と共に働きながら生活することでもっともっと深いカンボジアを感じたいと思ったからです。また、“ゲストハウス”はホテルとは違いお客様との距離がとても近かいのです。

“マントラ”にいてよく思うことは、“お客様とまた絶対にどこかで会える”そんな気がするのです。“旅でたまたま泊まった宿のスタッフのひとり”でしかないのかもしれませんが、それでもお客様と出逢えることがわたしにとっては本当にうれしくて楽しくてしあわせです。

決して楽しいことばかりではなく、言葉の壁や文化の違い、勘違いでスタッフとのコミュニケーションに苦戦する事もありますが、マントラでないと学べないことや経験できないこと、“ご縁”と“出逢い”がたくさんあると思っています。自分自身のあたりまえが通じないこの国で自ら動かなければ何も始まらないということや、失敗をして学ぶことがたくさんあるのです。限られたインターンの期間の中で、ここでしかできないことにどんどんチャレンジをしていこうと思います。

ふくし AWARD 受賞者

ふくし AWARD 優秀作品紹介

佐藤 慎一 教授

ふくし AWARD とは、大学の授業や課外活動で学んだことについて、プレゼンテーション能力・ICT 活用能力を基礎にしてお互いの学びを「表現」し合う、全学部の学生を対象とするプレゼンテーションコンテストです。1 月 29 日に開催され、日本語部門、英語部門とあり、合計で約 80 件のエントリーの中から、1 次審査を通過した 8 件の当日発表が行われました。国際福祉開発学部 2 年石村未来さん、鈴木良輔さん、橋本健太さんのグループは、「Women in the workforce」と題したプレゼンテーションで、見事、大賞を受賞しました。石村さんのコメントを以下に紹介します。日頃の学びの成果を発信し、学部・学年を超えた交流で、参加者相互に得るものは大きかったようです。

３年　石村 未来（明石城西高校出身）

私のグループは、「女性問題」として育児と仕事について取り上げ、女性だけでなく男性にも考えてもらいたいと思い発表しました。どう構成するかは難しかったですが、大賞をいただけて光栄に思います。また、自分たちのグループ以外の発表も聞くことができとても勉強になりました。日本語部門では、他学部の発表が多かったので、知らないことを興味深く学ぶことができました。さまざまなトピックを今回で終わらせるのではなくさらに深めたいと思います。

英語キャンプでのボランティア

教職学生 English Camp で大活躍！

小倉 美津夫 教授（教職担当）

平成 28 年 2 月 13 日（土）・14 日（日）愛知県美浜少年自然の家で開催された小学校 3･4 年生児童を対象にしたイングリッシュキャンプで、教職ゼミ学生 6 名が外国人講師のアシスタントとして英語活動の補助に大活躍。子どもたちと英語を使いながら体を動かし、歌を歌ったり、ゲームをしたりして交流を深め、子どもたちに英語学習の楽しさを実感させることができました。ゼミ生は初歩的な英語によるコミュニケーションの学習指導法を体験的に学ぶとともに実践し、貴重な経験を積みました。

卒業論文紹介

Strategies to be a Self-regulated English Learner

佐藤 慎一 教授（ゼミ担当）

2016 年 3 月に卒業した宇野稀恵さんの卒業論文を紹介いたします。30 ページを超える英語論文ですが、タイトルを日本語にすると、「自律的な英語学習者になるための方略」といったところでしょうか。宇野さんは、1･2 年次と WYM でプレゼンテーションを行い、2 年次にはプレゼンテーショングループのリーダーとして、他のグループの発表の進行管理や支援も行いました。また、3・4 年次には、それぞれ、韓国、中国で開催された国際教育メディア学会に参加し、韓国の国立全南大学の学生と協働で実施した調査・研究の発表を行いました。こうした、自分自身の 4 年間での英語学習･英語活用、全南大学の学生との協働調査の集大成として執筆されており、質が高いのはもちろんのこと、英語学習者にとって有意義な知見が多く含まれた論文となっています。

卒業生は今

青年海外協力隊の資質を育てる学部教育

2013 年 3 月卒　森田 充祐樹（岐阜商業高校出身）

在学時代　台湾でのアジア交流　協働プレゼンテーション

世界のために何か、役立つことがしてみたい、そんな気持ちから国際福祉開発学部を選びました。在学中は、授業の一環としてカンボジア、ゼミの活動で韓国や、台湾の学生交流に参加し、協働プレゼンテーションに取り組みました。授業で学び、実際に自分の体験でそれらの知識を定着させていったように思います。今、青年海外協力隊としてインドネシアで活動できているのは、間違いなく国際福祉開発学部で多くを学べたおかげです。支援とは何か？幸せとは何か？など、自分の生きる方向性をともに考える事が出来たのは、この学部だったからだと思います。

現在している仕事内容

インドネシアの首都ジャカルタから電車で約 1 時間半のボゴールという街にある、国立の知的障害者社会リハビリテーションセンターに配属されています。50 人の知的障害者（自閉症、ダウン症）が利用しており、障害の程度に合わせて様々な活動（手工芸、スポーツ、音楽、ボーイスカウト、国語算数、職業＆生活訓練など）を行っています。施設の職員が障害の程度に応じた適切な個別支援を行えるよう支援することと

インドネシアの作業所にて

なっており、その担当をしています。赴任して３カ月程ですが、日本でやってきたことがそのまま当てはまらないことが多く、ゼロからこの国における適切な支援の仕方を探っていく必要を感じています。現地の人々と共に毎日を送り、見えてきた課題を一緒に解決出来れば最良ではないだろうかと考えています。

就職状況

発学部の就職について　企業・福祉分野に加え、英語教員も

巨大なグローバル・アジア市場を舞台として人材の獲得競争が激化する中、卒業生は中部国際空港でのインターンシップなどで培った国際力を活かせるフィールドを持つ企業へ進出しました。

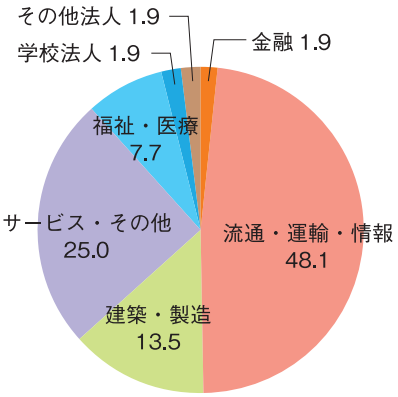
○**就職先**　知多信用金庫、マイナビ、西日本旅客鉄道、ANA 中部空港、ヨコハマタイヤジャパン、青山商事、カネスエ、トヨタカローラ愛豊、木曽路、リゾートトラスト、タマホーム、日本郵便、日本オーラルクリニック、学校法人中野学園オイスカ高等学校

就職特徴

●語学力を活かしたサービス業、中でも観光業・航空業・リゾート開発業への就職実績。

●英語教員免許を取得し、国際社会開発の現場経験を伝えられる、中学高校の英語教員を輩出。

●国際機関での活躍を視野に大学院進学へ。（3 名）



新任教員の挨拶

米津 明彦　教授

英語教育

4月1日付けで本学国際福祉開発学部に着任いたしました。総合英語コミュニケーション科目と教職課程科目を担当しています。これまで、愛知県高等学校、総合教育センター等の教職員として勤務し、授業づくりに関する実践研究や英語科教員研修に携わってきました。学生の皆さんが発信型英語力を身に付け、学校教育など様々な分野で力を発揮し活躍できるようにサポートしていきます。どうぞよろしくお願いいたします。

学部の前期予定

４月　新入生オリエンテーション、１年生合宿「春期セミナー」
国際フィールドワークⅠ説明会

５月　基礎演習（１年生ゼミ）での学内資源マッピング
オープンキャンパス（模擬講義、学生企画、グローバルラウンジ体験）

６月　ワールドユースミーティング予行演習
「休みの間、世界で何をしてきた？」上級生による海外体験報告会

７月　１年生向けの教職希望者相談コーナー
学内 TOEIC テスト
国際フィールドワーク（１年生の海外研修）希望票提出期限
オープンキャンパス（模擬講義、学生企画、グローバルラウンジ体験）
中部国際空港スカイデッキでセントレア盆踊りに参加
前期試験期間

８月　ワールドユースミーティング海外参加者来日
（インドネシア、カンボジア、韓国、台湾、フィリピン、マレーシア）
ワールドユースミーティング（国際英語プレゼンテーション大会）の開催
ワールドユースミーティング海外参加者の観光企画
オープンキャンパス（模擬講義、学生企画、グローバルラウンジ体験）

９月　夏休み集中英語講座（全学年）

発行人：日本福祉大学 国際福祉開発学部
〒477-0031　愛知県東海市大田町川南新田 229
TEL. 0562-39-3811　FAX. 0562-39-3281　http://facebook.com/nfuiwd/
編集人：国際福祉開発学部　学部長　小倉 美津夫、教授　影戸 誠
お問い合わせ：kokusai@ml.n-fukushi.ac.jp

国際福祉開発学部　ブログ

フェイスブック